

俗耳談

市川寬齋口話  
山田正脩筆

四篇卷五

特別

15

1420

15





時

門 45  
號 1420  
卷 15

信取 流口編

藤浪氏藏

書印

山田正脩筆

一 流の刻如きもの轉りて十二肖余流と子不記す  
物さハ北方の正位ハ流の川の畧しつるなり  
多田氏撰す本流を母傳とすありきぬふ  
流ハ水の中流とハ瓶とて用ハ流なり水ハ水  
陰氣ぬ根の國とハ陰氣と好むとよと好ま  
とハ東掛け新流ゆり十二肖余と好流日  
めつとく子なりけり好まるとハ他云陰氣と

昭和二十八年  
二月二十四日  
辨求



あじよの友は年々こころをけいせしめてゆく  
秋せすともいふらん元北の方とよき事す  
嵐ふれ即ち方途よりあつくとすまはせし  
一 小智とてかゝるこころをけいせしめてゆく  
くゝおれとてかゝるこころをけいせしめてゆく  
しあり

一 同尉の友名ありとて淫を不尉と老者の様を  
義いん曰未だいふとていふ事ありて昔尉あり  
たをありてとていふとていふ事ありて昔尉あり

わきまをいふも淫も尉とていふ事ありて昔尉あり  
いふ事ありとていふ事ありとていふ事あり

一 同尉の友名ありとて淫を不尉と老者の様を  
いふ事ありとていふ事ありとていふ事あり  
一 舟子从りていふ事ありとていふ事あり  
一 漢字の松の字を車鉤心とていふ事あり  
義の字あり

一 舟子从りていふ事ありとていふ事あり  
必如くもいふ事ありとていふ事あり  
東をいふ事ありとていふ事あり











一 同雷の樹を死する狄に傑を過て救を求む  
乃樹を伐くをいふとありや曰け事一書  
るる今も其出と高きこれに命池あり船書を  
あつすよと云ふとありんや曰れ事と既狄に傑と  
名と命池をくよる事ありや曰れ事とありん  
歴史又は志と云ふと一書池かす事歴史と  
と命池をいふとや

一 甲乙二人の戦いの事とありて曰か事とあり  
甲曰九とありん事とありて曰中とありん事とありん

くん事とありん事とありん事とありん事とありん

一 竹宮海軍の戦い毒蛇の事とありて曰か事とありん  
事とありん事とありん事とありん事とありん  
事とありん事とありん事とありん事とありん  
事とありん事とありん事とありん事とありん  
事とありん事とありん事とありん事とありん  
事とありん事とありん事とありん事とありん

一 海軍の戦いの事とありて曰か事とありん事とありん



おそり細の流しるおけ取面障しる申年を  
てようしや又そ我わらう和田は盛平  
るわく狂をしく狂をさるるも新  
ういよるん屋建たるく一信不  
めらこいものき

一かぶらにかぶらうの器形と華流  
ころと川す壳の字と無愛也とほす  
なり賢をさるるけらるるゆすけ  
かぶらの中らるる又わらるる  
かぶらの中らるる又わらるる

大人とかんふる名をらるる

一某幼めきと能治の句日けりわの  
名ある一けむるのうけ後け  
うり後めさるる一と也ぬれ  
名やあむむのいけあり

一けはめわらるるうけあり  
うらうりけはの洋流す  
とれくもゆめ及ぼす  
けらそとけけおほも



あまのしとりのこころのそらとまをどしとけり  
うらむゆはほろいとこころの道する

一色に品を極く一癖のやうにふるふふのそらあり  
吾す極くはわんふふふん<sup>ニカラ</sup>幾色まらわん  
りふふふふふふふふふ

一 同後を平記おそは流道断おひまると音の  
今れ平記おひまると音の 曰ふゆふふふ  
一 今れ平記おひまると音の 曰ふゆふふふ  
措く極くはわんふふふふふふふふふ

百々一々けりし 且は記名ある文のふふふ  
ふふふふふふふ 今れ平記おひまると音の  
書るに流るる

一 平記おひまると音の 曰ふゆふふふ  
古人の上おふふふふふふふ 薛能の音後  
後流おひまると音の 曰ふゆふふふ  
け一句ふふふ中ふふふふふふふ  
已し平記おひまると音の 曰ふゆふふふ  
傲慢ふふふふふふふ 是舞人の音とふふふ



自も帯を新しと浴衣

一伽婢子も徳施提言風と載す云圖八列のるる  
備さうととしうしきと作り言、凡信好意  
三列のるる提る風とてこれありき  
の事、方物取信たもてこ強風とす来又とく  
これ小遇ひく人あるとましくつくそん  
か水これと実ふこれあをれとあくこづい  
このる某少めあををこら、強く同く  
今こふられけみ別めらめこよく他部、かハ

なするうらも某滑く備うら、そん小中、  
あまこしうくも理と考ふ、こを、  
這は風の 中、かたうきん風も希あり  
そくも希あり風のあすらしあま、  
今こふれと実ふこれあをれとあくこづい  
風といふは海をさうと照らすあやう  
け、この車中風あ、けか列よとく、  
いとも亦風の観たし或、時々は風の中を  
たうこれ亦喜同、あま、かたうきん風も希あり



うもまわくくえくせう及くまのれい名はあはる  
そのこころ二つく思ふて亦甚怪むくまのれい此  
ころよめは

一回此後同路くまのれいと毎く用定む事とまは  
けは後まきんや曰く消よあはる事亦も言  
と知す時とけ一故より出る言ん事彼  
いふらあはるまのれい下候のこころ一これ亦必実とせん  
れれも俗言のえと求んと欲せんこのまのれい  
ゆふとあはるく一後て字とらて十中つ一人やま

自序の序

一人亦半波託せんと欲すくまのれい詞也く常り  
是より吾らさうく上る是如法と云く  
まのれい亦余と知す事とたれく我詞乃  
身くまのれい肯容むやま穉言くまのれい  
命あり物れも如法あり大抵れと云く人何  
もくまのれい常りまのれい亦小言く  
病んや消すく亦必はあり候と云く  
まのれい言なりまのれい亦必はあり候と云く



何ぞと云ふよりいふ人ヤ強き事と云ふは強し  
強きと云ふ強きを強し

一 天門冬、又名地門を根葉を叶と云ふ事  
地と反對なり元々と云ふは、  
まこと反ト云地と云は、  
字と云ふ事と云ふは、  
吉山の如く、  
又あるの事と云ふは、  
又あるの事と云ふは

一 同格を填字云ふ事、  
幸人合とありしやと云ふ事、  
合と強しく合ひやと云ふ事、  
今もあつた事と云ふ事、  
合あり是れ事と云ふ事、  
かくいふ事と云ふ事、  
何れと云ふ事、  
人の事と云ふ事



曰これハ人ハ器ナリシヤノ群ナリ回ル乃  
群ナリノ墳字ノ如ク自修記外ツク曰自  
人のまゝ〜(修記)指シて川志ナリ

一 向人れ其の継りふらん〜と云ふ何の義も曰  
一 体法も抑流ノハ別行母体ノモト人ト載スル  
と云ふ所一 体ハあふをれねほのま〜と云ふ言  
これノハ法〜りいハ、物〜〜〜と云ふ字と云む  
云々

一 雲ノ小敷あり某ハ何可〜と云ふ底出〜

雲ノ花と云〜云々ハ、  
自云〜ハ、  
と云〜  
又然〜と云〜  
〜  
これ〜  
物〜  
何〜  
又底ノ正〜  
徑寸〜



つるを喰ふのめとあり

一 論 濟云牛、尋半馬、馬、尋半人、他記すらよのどとて  
馬、大抵三十年たゆとふ、其の牛八十歳まで  
二十歳、小孫、六畜の目、難を多く、一、其の  
とも、今、も、其のとり、よ、め、り、一、これ、も、大、半、牛  
の、妻、と、知、る、一、一、極、廿、年、と、生、ま、る、ゆ、し  
一 同 和 漢、之、方、圖、會、小、載、す、如、く、ら、も、一、本、列、お、ま、り  
物、よ、合、字、す、ら、り、日、御、り、某、梅、よ、本、列、お、ま、り、物、を  
筆、の、箱、よ、あ、り、一、一、を、字、に、と、る、是、ハ、極、中、の

一 一、より、紅、列、海、ま、く、柳、て、一、よ、小、齋、馬、ま、れ、ハ  
伊、勢、ふ、も、同、け、を、あ、ら、ま、り、一、一、本、列、合、體、一、  
最、小、矣、一、と、い、ふ、ハ、和、漢、圖、會、と、曰、物、を、り、け  
小、矣、ハ、某、未、見、曰、名、矣、物、を、り

一 一、三、因、果、物、法、と、ま、す、あ、ら、い、ま、ふ、け、ち、の、ま、と  
難、い、ま、あ、ら、ま、り、て、ま、け、ハ、皆、あ、り、し、よ、一、一、を、  
か、け、了、す、の、ま、と、ま、ら、い、一、一、三、七、徒、小、等、と、深  
く、ん、ま、ら、い、ま、り、ま、り、ま、り、し、て、一、一、三、七、等、と、  
あ、ら、い、ま、ら、い、ま、り、ま、り、ま、り、し、て、一、一、三、七、等、と、







ちまよるんころハ稚ねのちまよとちまよりあがり  
ちまよが向見しころちまよちまよ<sup>ちまよ</sup>ちまよ  
ちまよ



